

児童の英語、小学校英語活動、外国人、 外国に対する知識に関する意識調査

北條 礼子*・松崎 邦守**・北條 久也***

1. 研究の背景

2002年4月から、「総合的な学習の時間」が公立小学校に導入され、その国際理解教育の一環として、全国の各公立小学校の裁量により、英語活動が公立小学校でも実施されるようになった。

文部科学省による小学校英語活動実施状況調査（平成15年度実績）によると、全国の全公立小学校22,526校（平成15年5月1日現在）のうち88.3%にあたる19,897校が「英語活動」を実施したことが報告されている。文部科学省による前年度と同調査では、53.1%であったので、小学校英語活動を実施している学校数が確実に増加しているといえよう。また、同調査結果の年間実施時間数別学校数（学年別）によれば、まず公立小学校のうち第1学年で英語活動を実施している数は15,121校（全小学校の67.1%）、第2学年で15,250校（67.1%）、第3学年で17,863校（79.3%）、第4学年で18,216校（80.9%）、第5学年で18,416校（81.8%）、第6学年で18,734校（83.2%）である。全国公立小学校の約80%が第3学年から英語活動を実施しているが、低学年においても67%の小学校において実施されていることが報告されている。

また、年間実施時間数別学校数は第1学年、第2学年では年間11時間以下の実施がそれぞれ12,732校（79.2%）、12,770校（83.8%）であるが、第3学年では12,086校（67.7%）、第4学年では11,989校（65.8%）、第5学年では11,823校（64.2%）、第6学年では11,798校（63.0%）となっている。また、年間実施時間数11～22時間の学校数は第1学年、第2学年では、それぞれ1,865校（12.3%）、1,926校（12.6%）であるが、第3学年では3,868校（21.7%）、第4学年では4,153校（22.8%）、第5学年では4,343校（23.6%）、第6学年では4,427校（23.6%）となっている。

以上から、低学年においては、英語活動が7割弱の公立小学校で実施されるようになり、年間の実施時間数が11時間以下が8割弱を占めていることが指摘できる。さらに中学年、高学年については、英語活動は約8割の公立小学校で実施され、実施時間数は年間22時間以下が第3学年では90%、第4学年では約89%、第5学年では88%、第6学年では87%となり、ほぼ9割の公立小学校で英語活動が行われていることがわかる。

しかし、全国的にみるとこのような結果であるとしても、英語活動実施についてはかなり温度差があると思われる。実際本学のある上越地区の資料をみると、年間学級あたりの平均英語活動実施数は全国平均と比較してみるとかなり少ない回数となっている。

このような状況の下、小学校における英語活動を経験する児童が、英語や小学校英語活動、外国や外国人に対してどのような意識を抱いているのかについての調査はあまりみられないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、児童の英語、英語活動、外国人、外国に関する知識に対する意識を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 実施時期： 2003年10月

3.2 対象者： M県S市立小学校児童274名（内訳は、3年生56名、4年生70名、5年生79名、6年生50名）。本校の位置する街はM県の県庁所在地に近く、そのベッドタウンとしての役割を果たしているが、漁港として有名な街である。本校では、4年前から、3年生以上を対象に年間5回「英会話に親

* 上越教育大学学習臨床講座 ** 千葉県沼南町立高柳中学校 *** 宮城県塩竈市立第一小学校

しむ活動」を実施している。同活動は、回数は年間5回であるが、約1ヶ月間にまとまるように調整されて実施されている。

3.3 測定具： 小学校以外で英語を学んでいるかどうかについて問う1項目（2者択一形式）と英語、英語活動、外国人、外国に関する知識についての意識に関する9項目（5段階尺度形式）の計10項目から成るアンケート。

後者の9項目については、各項目への回答に対する理由を自由記述で書くように全児童に求めた。

3.4 実施方法： 1問ずつ各学級担任が読み上げ、児童が回答するという方式で約10～15分で実施した。記名式

3.5 分析方法： 直接確率計算、 χ^2 検定、分散分析

4. 研究の結果と考察

4.1 小学校外での英語学習状況について

今回の調査で対象とした小学校児童3年生から6年生までの計274名が小学校以外で英語を学習しているかどうかについて、児童の回答を集計した結果と、さらに直立確率計算を行った結果は表1に示すとおりである。

表1から、3年生から6年生までの計274名のうち、小学校以外で英語を学んでいる児童は54名、学んでいない児童は220名であり、直接確立計算の結果、1%レベルで有意に小学校以外で英語を学んでいる児童数が少なかった。さらに3年生から6年生を学年別にみても同様に、各学年とも1%レベルで有意に小学校以外で英語を学んでいる児童数が少ないことが明らかになった。

表1：「小学校以外で英語を習っているかどうか」に関する集計と直接確率計算結果

項目	N	はい	いいえ	直接確率計算（両側検定）	
3年	56	10	46	p=0.000 **	はい<いいえ
4年	70	14	56	p=0.000 **	はい<いいえ
5年	79	11	68	p=0.000 **	はい<いいえ
6年	69	19	50	p=0.000 **	はい<いいえ
全体	274	54	220	p=0.000 **	はい<いいえ

さらに、学年間で差があるかどうかも χ^2 検定により検討したが、有意な差はみられなかった（ $\chi^2(3)=4.46$, ns）ことから、学年による違いはないことが改めて確認された。

4.2 児童の英語活動に対する意識について

3年生から6年生までの児童全体と学年別の英語活動に対する意識に関する8項目（5段階尺度）の平均、標準偏差は表2に示すとおりである。

表2から、児童全体の英語を話せるようになりたいという項目の平均のみが4.21と4点台を示していて、英語を話せるようになりたいという児童の意識が高いことがうかがえる。また、4年生の回答の平均が8項目を通じて4点台であることが注目される結果であった。

表2：児童の英語活動に対する意識に関する項目の平均・標準偏差（SD）

項目	項目内容	全体 (N=274)		3年生 (N=56)		4年生 (N=70)		5年生 (N=79)		6年生 (N=69)	
		平均	SD								
1	英語を勉強するのは楽しみ	3.69	1.31	3.96	1.22	4.61	0.73	3.39	1.20	2.87	1.32
2	外国の人と英語で話してみたい	3.38	1.43	3.36	1.41	4.04	1.36	3.14	1.40	2.99	1.33
3	外国の人となかよくなりしたい	3.86	1.25	3.45	1.51	4.50	0.97	3.71	1.21	3.74	1.07
4	いつかは外国に行ってみたい	3.99	1.41	3.55	1.62	4.09	1.45	4.03	1.28	4.19	1.30
5	英語はおもしろそう	3.72	1.28	3.73	1.38	4.53	0.83	3.42	1.25	3.22	1.22
6	英語を話せるようになりたい	4.21	1.17	3.63	1.60	4.59	0.99	4.16	0.99	4.35	0.90
7	外国のことを知りたい	3.65	1.31	3.54	1.53	4.16	1.18	3.43	1.23	3.49	1.23
8	外国の生活や食べ物に興味がある	3.50	1.45	2.89	1.71	4.06	1.25	3.32	1.39	3.62	1.27

次に、この8項目について、学年ごとに差があるのかどうかを検討するため分散分析を実施した。その結果は表3に示すとおりであるが、交互作用が1%レベルで有意であった ($F(7,1890)=7.22$)。

表3：分散分析表

要因	SS	df	MS	F
要因A (学年)	243.7069	3	81.2356	13.34 **
個人差	1643.6441	270	6.0876	
要因B (項目)	125.6034	7	17.9433	8.51 **
A×B	146.8995	21	6.9952	7.22 **
S×B	1831.9637	1890	0.9692	
全体	3991.8175	2191		**p<.01

そこで、各要因の単純主効果を分析した結果、表4に示すとおりとなった。表4から、B水準においてはB④が5%レベルで有意だった他、その他の7水準において1%レベルで有意差がみられた。また、A水準においてはA①からA④までの4水準において1%レベルで有意差がみられた。

表4：A×Bの交互作用の分析表

要因	SS	df	MS	F
A at B①:	115.68	3	38.56	8.89 **
(S at B①:	360.42	270	1.33)	
A at B②:	44.08	3	14.69	7.78 **
(S at B②:	510.18	270	1.89)	
A at B③:	41.66	3	13.89	9.79 **
(S at B③:	382.95	270	1.42)	
A at B④:	16.01	3	5.34	2.71 *
(S at B④:	531.83	270	1.97)	
A at B⑤:	67.32	3	22.44	16.14 **
(S at B⑤:	375.38	270	1.39)	
A at B⑥:	33.80	3	11.27	8.93 **
(S at B⑥:	340.62	270	1.26)	
A at B⑦:	23.15	3	7.72	4.69 **
(S at B⑦:	443.81	270	1.64)	
A at B⑧:	48.90	3	16.30	8.30 **
(S at B⑧:	530.42	270	1.96)	
B at A①:	45.85	7	6.55	6.76 **
B at A②:	31.06	7	4.44	4.58 **
B at A③:	62.00	7	8.86	9.14 **
B at A④:	133.59	7	19.08	9.69 **
(S×B	1831.96	1890	0.97)	

表4の結果から、まずB水準(項目)における要因A(学年)の単純主効果について、LSD法による多重比較を行ったが、その結果は表5に示すとおりである。

表5：LSD法による多重比較の結果(項目ごとの学年による差)

項目	項目内容	MSe (p<.05)	平均の大小比較
1	英語を勉強するのは楽しみ	1.34	4年>3年>5年>6年
2	外国の人と英語で話してみたい	1.89	4年>3年, 4年>5年, 4年>6年
3	外国の人となかよくなりたい	1.42	4年>3年, 4年>5年, 4年>6年
4	いつかは外国に行ってみたい	1.97	4年>3年, 6年>3年
5	英語はおもしろそう	1.39	4年>3年, 4年>5年, 4年>6年, 3年>6年
6	英語を話せるようになりたい	1.27	4年>3年, 4年>5年, 5年>3年, 6年>3年
7	外国のことを知りたい	1.64	4年>3年, 4年>5年, 4年>6年
8	外国の生活や食べ物に興味がある	1.96	4年>3年, 4年>5年, 6年>3年

+.05<p<.10 **p<.01

表5から、明らかになったことをあげると以下のとおりである。

- ①項目1の英語を勉強するのが楽しみかどうかについては、4年生、3年生、5年生、6年生の順に英語を勉強することが楽しみだと感じていた。
- ②項目2の外国の人と英語で話してみたいかどうかについては、4年生が、他の3年生、5年生、6年生より英語を話してみたいと思っていた。
- ③項目3の外国の人となかよくなりたいかどうかについては、4年生が、他の3年生、5年生、6年生より外国の人となかよくなりたいと考えていた。
- ④項目4のいつかは外国に行ってみたいかどうかについては、4年生、6年生が3年生に比べていつか行ってみたいと感じていた。
- ⑤項目5の英語はおもしろそうだと思うかどうかについては、4年生が他の、3年生、5年生、6年生より英語がおもしろそうだと思う、さらに3年生が6年生に比べて、その思いを強く感じていた。
- ⑥項目6の英語を話せるようになりたいかどうかについては、4年生が3年生、5年生より話せるようになりたいと感じ、また3年生と比べて5年生、6年生の方が英語を話せるようになりたいと感じていた。
- ⑦項目7の外国のことを知りたいかどうかについては、4年生が他の3年生、5年生、6年生より外国のことを知りたいと感じていた。
- ⑧項目8の外国の生活や食べ物に興味があるかどうかについては、4年生が3年生、5年生より強い興味を抱き、また6年生が3年生より強い興味を抱いていた。

以上から、本研究の調査対象となった小学校においては、4年生が特に英語活動に対して積極的な意識を抱いていることがうかがえた。

表5の結果からさらに、A水準における要因Bの単純主効果について、LSD法による多重比較を行ったが、その結果は図1から図8に示すとおりである。図2、4、6、8は図1、3、5、7のそれぞれの図をわかりやすく図示したものである。

5	ns						
6	*	ns					
4	*	ns	ns				
7	*	ns	ns	ns			
3	*	ns	ns	ns	ns		
2	*	*	ns	ns	ns	ns	
8	*	*	*	*	*	*	*
	1	5	6	4	7	3	2

図1：3年生のLSD法による8項目の多重比較① (MSe=0.97, 5%水準)

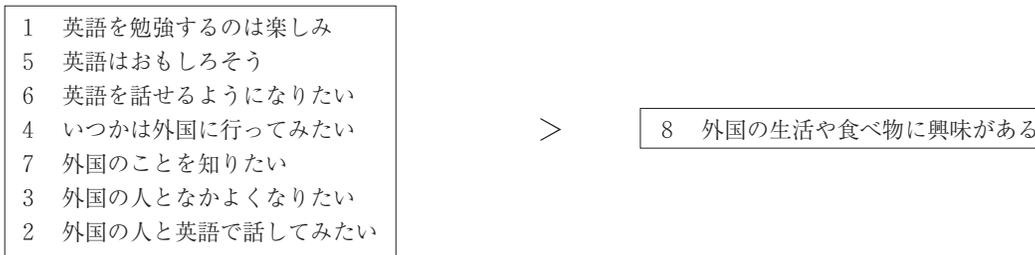


図2：3年生のLSD法による8項目の多重比較② (MSe=0.97, 5%水準)

6	ns						
5	ns	ns					
3	ns	ns	ns				
7	*	*	*	*			
4	*	*	*	*	ns		
8	*	*	*	*	ns	ns	
2	*	*	*	*	ns	ns	ns
	1	6	5	3	7	4	8

図3：4年生のLSD法による8項目の多重比較① (MSe=0.97, 5%水準)

1 英語を勉強するのは楽しみ	>	7 外国のことを知りたい
6 英語を話せるようになりたい		4 いつかは外国に行ってみたい
5 英語はおもしろそう		8 外国の生活や食べ物に興味がある
3 外国の人となかよくなりたい		2 外国の人と英語で話してみたい

図4：4年生のLSD法による8項目の多重比較② (MSe=0.97, 5%水準)

4	ns						
3	*	ns					
7	*	*	ns				
5	*	*	ns	ns			
1	*	*	*	ns	ns		
8	*	*	*	ns	ns	ns	
2	*	*	*	ns	ns	ns	ns
	6	4	3	7	5	1	8

図5：5年生のLSD法による8項目の多重比較① (MSe=0.97, 5%水準)

1 英語を勉強するのは楽しみ
2 外国の人と英語で話してみたい
3 外国の人となかよくなりたい
4 いつかは外国に行ってみたい
5 英語はおもしろそう
6 英語を話せるようになりたい
7 外国のことを知りたい
8 外国の生活や食べ物に興味がある

図6：5年生のLSD法による8項目の多重比較② (MSe=0.97, 5%水準)

4	ns						
3	*	*					
8	*	*	ns				
7	*	*	ns	ns			
5	*	*	*	*	ns		
2	*	*	*	*	*	ns	
1	*	*	*	*	*	*	ns
	6	4	3	8	7	5	2

図7：6年生のLSD法による8項目の多重比較① (MSe=0.97, 5%水準)



図8：6年生のLSD法による8項目の多重比較② (MSe=0.97, 5%水準)

以上の図1～図8からわかることをまとめると、以下に述べるとおりである。

- ①図1, 図2に示したように、3年生の英語、外国や外国人についての意識を平均の高い順に並べると項目1, 項目5, 項目6, 項目4, 項目7, 項目3, 項目2, 項目8となる。3年生は英語を勉強するのは楽しみでありおもしろそうであり、英語を話せるようになりたいと思ひ、外国のことを知りたいし、外国の人と仲良くなって英語で話してみたいと思っていた。しかし、外国の生活や食べ物については、以上の7項目との間に有意差がみられたことや平均がこの項目のみ2点台の2.89とかなり低いことから、はっきりと3年生の関心が低かった。
- ②まず、本調査の対象となった4年生の特徴は、8項目の平均がすべて4点台であり、大変英語や外国、外国人について関心が高いことである。図3, 図4からわかるように、4年生の以上についての意識を平均の高い順に並べると、項目1, 項目6, 項目5, 項目3, 項目7, 項目4, 項目8, 項目2となる。4年生は英語を勉強するのが楽しみで、おもしろそうだと思ひ、英語を話せるようになりたいし、外国の人と仲良くなりたいと感じている。さらに、外国のことを知りたいし、いつかは行ってみたいと思ひ、外国の生活や食べ物に興味があり、外国の人と英語で話してみたいと感じていた。ただし、前者の4項目と後者の4項目との間に有意差があり、平均と考え合わせると関心が低いとは言えないが、明確に関心の強さに違いがみられた。つまり、英語や英語の授業に対する関心の方が外国や外国人に対する関心より強いことがわかった。
- ③図5, 図6をみると、5年生の英語、外国や外国人についての意識は平均の高い順に、項目6, 項目4, 項目3, 項目7, 項目5, 項目1, 項目8, 項目2となる。本調査の対象となった5年生の特徴は、他の学年と異なり、8項目間に有意な差がみられなかったことである。平均をみると3.14から4.16を推移しており、英語、外国や外国人について、どちらかというとき肯定的な気持ちを抱いていた。
- ④図7, 図8から、6年生の英語や外国、外国人についての意識を平均の高い順に並べると、項目6, 項目4, 項目3, 項目8, 項目7, 項目5, 項目2, 項目1となる。本調査に参加した6年生は、英語を話せるようになりたいし、いつかは外国に行ってみたいという気持ちがかなり強い。さらに、平均と考え併せると、どちらかというとき外国人や外国の生活や食べ物、外国のことを知りたく思うものの、英語そのものについてはどちらかというとき否定的に捉えていた。

以上から、各学年の特徴をまとめると以下のようなよう。

- ・ 3年生は、外国の生活や食べ物への関心が低かった。
- ・ 4年生は、英語や英語の授業に対する関心の方が外国や外国人に対する関心より強かった。
- ・ 5年生は、目立った特徴はみられなかった。
- ・ 6年生は、英語を話せるようになりたいし、いつかは外国に行ってみたいという気持ちがかなり強かった。

菊田・牟田（2001）は、小学校英語活動の成果について包括的な研究を行っているが、同活動の効果は「児童の年齢」要因が大きく作用し、低・中学年に対して「英語への興味」、「英語学習への取組みやすさ」の効果が大きく、高学年に対して「異文化理解」についての効果が大きいことを報告している。本研究は対象校が公立小学校1校のみであり、対象学年も中・高学年であるが、本調査の結果は菊田・牟田（2001）による調査結果を部分的に支持する結果であると考えられる。

4.3 児童の英語活動に対する意識に関する自由記述から

本調査の対象となった児童の自由記述は未回答が多い学年もあり、統計的な検定は加えることができなかった。ここでは参考資料として、主な点を紹介する。

4.4.1 学年による違いについて

表5から明らかになったように、本調査の対象校の4年生は8項目のうち、項目1「英語を勉強するのは楽しみ」、項目2「外国の人と英語で話してみたい」、項目3「外国の人となかよくなりたいたい」、項目5「英語はおもしろそう」、項目7「外国のことを知りたい」の5項目において、他の3学年より肯定的に捉えていた。

自由記述をみると、4年生は全般的に各項目に対して肯定的な意見が多い。例えば、項目1「英語を勉強するのは楽しみ」については「楽しそうだから」、「おもしろそうだから」、「3年の時楽しかったから」、「ゲームが楽しかったから」、「もっと英語を知りたいから」、「英語が好きだから」という回答がそれぞれ数名ずつみられ、否定的な回答としては「ちょっと難しそう」、「英語が苦手」の2回答のみであった。3年生では、「楽しい」、「おもしろい」、「好き」という回答が19例あり、わからない、難しいという回答が12例あった。5年生では、「楽しくない」、「むずかしい」、「わからない」、「つまらない」という否定的な回答が27例あり、6年生では「難しい」、「楽しくない」という回答が30例みられ、その中には、「みんなに発音を聞かれるのが嫌」と具体的な理由を述べている回答もあった。

項目2「外国の人と英語で話してみたい」については、6年生の平均が2.99と2点台であった。そこで6年生の回答をみると、なぜ外国の人と英語で話してみたくないのかという理由として、「英語が話せない」、「わからない」、「恥ずかしい」、「自信がない」という回答が約30例みられた。

また、項目4「いつかは外国に行ってみたい」をみると、4年生と6年生の意識が3年生より強かった。この項目内容に対して意識の低かった3年生の自由記述をみると、「お金がかかるから」、「大人になっていけばいい」、「日本がいい」、「外国の料理がたべたくないから」、「ひこうきでようから」というような現実的な理由が目立った。

項目6「英語を話せるようになりたい」については、3年生が他の3学年より、話せるようになりたいという気持ちが低く、また4年生は5年生よりその気持ちが強かった。3年生の回答をみると「わかんない」、「むずかしいから」、「なんとなく」などの回答が複数みられ、少なくとも3年生の児童は英語を話せるようになるという項目内容を十分に理解していないように思われる。

最後に項目8「外国の生活や食べ物に興味がある」は、4年生が3年生、5年生より興味があり、6年生は3年生より興味があった。項目8において3年生の平均が2.89と2点台を示した。そこで、自由記述をみると、3年生は「外国の食べ物が食べたい」という回答例の他に、「きょうみがない」、「まずそうだから」、「たべたことがないから」、「いやなたべものだったらいやだから」などの否定的な回答も複数例ずつみられた。

4.4.2 各学年ごとの項目間の差について

図1から図4の結果については、ここでは特に図4に示した6年生の回答に注目する。

6年生は、英語を話せるようになりたいし、いつかは外国に行ってみたいという気持ちがかかなり強かった。英語を話せるようになりたい理由として、「話せると楽しいから」という回答の他に多くみられるのは、「将来、役立つから」、「英語が話せると便利だから」という道具的動機づけとなる回答例であった。また、外国に行きたい理由として、「行ってみたいから」、「楽しそうだから」という抽象的なものが多かった。

6. 今後の課題

今回の調査では、4年生がなぜ英語や英語活動、外国人や外国の食べ物・生活について特に関心が高いのかについての理由は、明らかにすることができなかった。今後、児童の意識をより詳しく知るため、直接聞き取り調査を加えるなどの工夫が必要であると考えられる。

今回の調査は、ある特定の小学校を対象として行ったものであり、結果を一般化すること困難である。将来的に一般化に耐えうる規模の調査が必要である。

参考・引用文献：

- 菊田玲子・牟田博光（2001）.「学習環境が小学校の英会話活動に及ぼす効果－研究開発校の報告書分析」日本児童英語教育学会研究紀要 第20号 1～8.
- 上越市ALT委員会（2004）.「平成15年度 ALTとのteam-teaching実践記録集」
- 北條礼子・松崎邦守（2003）.「小学校英語教育に対する生徒・保護者の意識調査：山梨県 I 中学校の場合」上越教育大学研究紀要 第23巻 第1号 1～10.
- 松川禮子（2004）.「明日の小学校英語教育を拓く」アプリコット
文部科学省HP <http://www.mext.go.jp>